

令和4年4月に麻生養護学校長として着任しました、山崎明久です。

私は、麻生養護学校が開校した平成18年4月に教諭として本校に着任し、新しい学校づくりに携わらせていただきました。

当時は、平成19年度から特別支援教育に移行する過渡期でしたので、時代の先取りをした教育課程の編成や児童生徒への支援のかかわり、個別教育計画を活用した支援計画等々、新しい取組へのチャレンジが旺盛だったことを覚えています。

児童生徒への支援のかかわりといった取組では、「さん付け呼称」を組織的に取り組んだことがとても印象的でした。これまで、男性には「～くん」女性には「～ちゃん」が一般的だった呼称を男女、年齢、場面を分けずに「～さん」と呼称することを教員間のルールとしました。これは、呼び捨てやニックネームで呼ばないことで児童生徒への丁寧な対応を心がけようというねらいに加えて年齢に不相应な子ども扱いをしないというねらいもありました。

私が担任した高等部のある生徒のエピソードをご紹介します。彼は名前が「斎藤つよしさん（仮名）」とあって家族や中学校時代の先生からは「つっくん」と呼ばれていました。麻生養護学校では名字で「斎藤さん」で呼ばれることになり、ご家族の懸念は「本人が自分のことと受け止めないのではないか」「他人行儀の呼び方で親しみが持てない」とのことでした。学校の意図はお伝えしたものの、なかなか納得はいただけない様子でした。

このつよしさん、ご家族の愛情を一身に注がれて育ち、一見のんびりとした雰囲気なのですが実は自立心旺盛な生徒でした。お母様の心配をよそに自力通学を宣言して、何度も琴平下バス停を通過して溝の口駅やたまプラーザ駅まで行ってしまっていました。

お母様からは、「麻生養護学校に来て、急に大人びて自分でいろいろとやりたいというようになった。家族は心配が増えたので今まで通りかわいい『つっくん』でいてほしいし、送り迎えも親がしたい。」とのお考えを伝えられました。

ところがです。ある日の連絡帳に「今日から私も『つよしさん』と呼ぶようにします」と書かれているではありませんか。理由は紙の裏までびっしりと書かれていました。お母様をご本人に学校で呼ばれている「斎藤さん」はやめてもらおうねと伝えたところ、きっぱりとした表情で「斎藤さんは大人です。ぼくは大人です。学校一人で行きます。」と言ったそうです。年齢相応の対応をされるのが本人にとってはうれしかったということに気づかされたとのことでした。

私はこのエピソードが大切な教訓となっていて、以後勤務した学校では「年齢相応のかかわり」という視点を心がけてきました。

さん付け呼称のパイオニアである麻生養護学校の校長となった今、改めて学校の重点取組として「児童生徒への丁寧で適切なかかわり」をスタンダードにしていきたいと考えています。御理解御協力よろしく申し上げます。